

人間の基本構造：向き合うかたち

上田, 富美子
九州大学医療技術短期大学部診療放射線技術学科

<https://doi.org/10.15017/195>

出版情報：九州大学医療技術短期大学部紀要. 16, pp.75-82, 1989-03-03. 九州大学医療技術短期大学部
バージョン：
権利関係：

人間の基本構造

—向き合うかたち—

上 田 富美子*

La structure fondamentale de l'être humain selon celle de la réflexion

Fumiko Ueda

思春期に達した者が行う際立った行為の一つに「鏡を見る」ということがある。この時期私たちは真の意味で「鏡」に出会う。「鏡」を見つめる青年のまなざしは真剣そのもので、彼は意識するとしなにかかわらず、鏡に向い「自分とは何か」と問うているのであろう。そしてその問いは多分、「人間とは何か」という点にまで届いているに違いない。

そして往時はこの時期にたがわず「成人」の式が設けられた。ところで「鏡」の機能の中核は「反射」にあり、西欧系の言語ではそれは「反省」と同一でそこに何らの区別も置かれてはいない⁽¹⁾。してみると、「反省」こそ人であることの根幹にふれる何かであると言えはしないだろうか。そしてその時「鏡」は単なる道具を超えて、「人間」の隠された内奥を開示する⁽²⁾。

この小論ではしたがって、「鏡」を一つの手がかりとしながら、人間特有の「反省」への接近を試みることにしたい。

1

さて私たちは、このような人間の根幹にふれるいくつかの古い物語をもっているように思える。そうしたことが「物語」や「神話」などのかたちでしか表わせないと、何か重大な問題が隠されてもいるようだが、その点につい

て論じるのがここでの目的ではない。ただ言えることは、古い時代ほど人はその本質近くに生きていたということであろう。

そこでまず「神話」の中の一つの物語のあらましを提示し、「人間」についての考察をすすめる手がかりとしたい。

美少年ナルキッソスは泉に映る自分の姿に恋し、そのかなわぬ恋ゆえに衰弱死するが、死後その魂までが水を渡る時、そこに映る自身の影を見て、それを捉えようと手をのぼし、水中に呑み込まれる。遺体はついにあがらず、その場所には美しい花が咲く。それは彼にちなみ「ナルキッソス」(水仙)と名づけられる。彼に恋したニンフのエコー(こだま)⁽³⁾が終始彼につき従い、一部始終を見届ける。

まずこれがようやく成年にさしかかろうとする若者の物語である点が着目されねばなるまい。冒頭の部分で述べたように、思春期に達した頃、人はわれ知らず「鏡」の前へと走り寄るが、その点はナルキッソスとて同様であった。しかし彼は水に映るわが姿を「他者」と見て、そこにこの悲劇の発端は設定される。だがそれは果してナルキッソス特有の現象なのであろうか。私たちは自らの体験に照して「否」と言わざるをえまい。

この時期私たちは多分はじめて意識的に「鏡」

*九州大学医療技術短期大学部一般教育

と対峙したに違いないが、そこに見出すのは、向う側から深い沈黙とともにこちらを見返し覗き込む異形のものではなかったか。凝視にさらせばさらすほど、このものは何か見知らぬものへと変貌してゆく。このことが一そう青年を「鏡」へと引き寄せるが、「鏡」は日によって時刻によって異なった相貌を突きつけ、青年を翻弄する。鏡に向って「自分とは何か」と問うたはずが、答えが得られないばかりか、自分が一個の「謎」へと転化する。そしてまさにこの時、真に「人間」としてのスタートが切られるとは、何と人間は逆説的なことであろうか。しかしそれがまた「人間」であることの本質的一点を指し示してもいるに違いない。

そこでこの点について何らかの接近がはかられるためには、まず「鏡」の構造（それはとりも直さず「反省」の構造にほかならないのであるが）自体が明らかにされる必要がある。

「鏡」を介して自己は二分する。すなわち「こちら側」のそれと「あちら側」のそれとである。自らを顧みる「反省」においてもそれは同様である。ここに出現するのは向き合ったかたちであり、このかたちの意味するところは、一方が他方の後に廻り込むことは絶対に不可能であるということである。私たちは「鏡」の裏側に位置を占めることはできない。それは言い換えるなら、両者の間に越えがたい「断絶」が置かれることである。これは「反省」を自らの思索の手段としたデカルトのまた当然如実に体験するところでもあった。それは彼において適切にも「深淵」(profundus gurgis)⁽⁴⁾ と言いつわらわされている。

このように見てくると、青年初期の「鏡」の前での動転も次第に了解されてくる。すなわちそこには「鏡」を介してつぐないようもなく分裂した「自己」のかたちが提示されたのであり、青年は「深淵」を隔てて断絶の彼方にあるもう一人の自己にはじめて出会ったのである。これはやはり衝撃的なことであつたに違いない。

したがって「向う側のもの」が「こちら側」に対して「なじみのないもの」、換言すれば

「他者」として開示されるのは、深く「人間」に基本的な在り方に根ざすのであって、ナルキッソスにのみ特有な事柄ではないであろう。人はとりわけて青年期の初めに、この人間固有のかたちをむき出しのまま助けもなく突きつけられるのであり、その意味で青年は「人間」の模式であると言うことができ、ナルキッソスについてもそれは当てはまる。そして最早青年でないデカルトは、自らつくり出したこの構造の「シミュレーション」において同様の体験をもつのである。

身を以て自らが「亀裂」の上に懸けられていることを、自らがつぐないようのない「矛盾」の中に置かれていることを知ること、それは青年の「危機」を構成するであろう。彼等はいずれの側に自らを繋ぐべきかわからず、その間で激しく揺れ動き惑う。それはあたかも荒波に翻弄される小舟にも似て、その様子は《 Sturm und Drang 》(疾風怒濤) という言葉にみごとに写し取られている。

さて、ナルキッソスは憧れを以て未知の彼岸へと身を投げかける。隔てる「深淵」が彼を呑み込む。その姿を映した泉の深さについては明確な記述はないが、遺体があがらなかったという表現において底なしの深みが暗示される。そうであつたがゆえに「泉」はその静かさと相まって、この上なく良質の「鏡」となり、その姿をいやが上にもうるわしく映し出したに違いない。

だがその結末は「死」であつた。遺体さえ残らぬ決定的な「死」であつた。しかし彼が溺れたちようどその場所に、新たな「生命」が、美しい花となって甦える。ここで彼岸すなわち「向う側」が「生・死」と何らかの関連を有することが暗示される。それは自らがそこに生い、そこへと帰ってゆく場所であろう。しかしそこは越えがたい「深淵」によってこちらから隔てられている。「鏡」の裏面へ廻ることが不可能なように、私たちはどうしてもそこへ届くことはできない。ナルキッソスの決定的な死は、それを象徴するものであつた。

しかし、ナルキッソスに限らず、青年はしば

しば「死」の誘惑に駆られ、いわれもなく「死」へと急ぐ。それはさきに述べたように、青年のもとでは「人間」の分裂したかたちが蔽いがたく露呈されるために、彼等はそこに最も近くいるとすることができるからであろう。むき出しのこのかたちは、彼等に相對峙するものの無限の距離をしばし忘れさせるに相違ない。それにしても「生命」の盛りが「死」へと直結する事態は暗示的であり、ナルキッソスをはじめ青年たちは、その一身を以て「生・死」同根を訴えようとしているのかもしれない。

しかしながら「人間」成立の根拠が「深淵」を隔てた彼方に置かれることは、「自分とは何か」、「人間とは何か」という問いに対する答えが結局完全には与えられないということをも意味する。青年において顕著にあらわれ、それ以後私たちにつきまとうこの問いは、触れることのできない絶対の隔絶の前にはね返される。それともこの「禁忌」が予め設けられているからこそ、私たちはかえって問うというのでもあろうか。ナルキッソスの物語はしたがって、この問いゆえに堅固な壁に阻まれ、ついで去った「人間」の悲劇として読まれることも可能である。

ところで「彼岸」があることを知りながらも、それが「不明」であるという人間特有の在り方は、私たちを絶えず「迷い」や「さすらい」の中に置くに違いない。すべてが「かりそめ」のものとなり、一場の「夢」と化すであろう。また他方、未知の「彼岸」の影におびえ、「此岸」へと、「こちら側」の自分へと異様に固執する結果をも招くであろう。これは二項対立の構造を直截に突きつけられる青年においてとくに顕著であり、以後私たちに共通する執拗な傾向となる。すなわちそれが「自己中心主義」ないし「エゴイズム」と呼ばれるものであり、「自我」への執着がかえって他項との関係からもたらされることに私たちは容易に気づこうとしない。しかし「エゴ」への依存が決して私たちを安心させないことから明らかなように、私たちは対峙した「向う側」をどこかで知っており、そのことが「こちら側」の「自己」への執着をい

よいよ強固にすると言うことができるであろう。そしてそれは、「反省」の構造に依拠したデカルトの思索においても明確に見て取れるように思える。⁽⁶⁾

しかしながらこうした事態が「迷妄」を軽減するどころか、拡大する結果を招くに至ることはおのずから明らかである。「反省」における二項対立的在り方が私たちにかけている以上、一方への偏重は他方への軽視をもたらし、両者の分裂は一そう深まるに相違ないからである。では私たちはどうすればいいのだろうか。その手がかりもまた、ナルキッソスの物語との関連の中から見出すことができはしないか。

2

あの物語の中には、実はもう一人の登場人物が用意されていた。言うまでもなくエコー（こだま）がそれである。彼女は終始ナルキッソスにつき添うものの、決して表面に立つことなく控え目な役どころをになわされている。ではどうして彼女がナルキッソスの物語に必要なのだらうか。そのためにはナルキッソスの物語に先立つエコーたちのそれを見届けなければなるまい。

ニンフのエコーはもともと大変なお喋り好きで、そのためある女神の怒りにふれ、罰として呼びかけに答えることだけを許される。ある日エコーはナルキッソスを見かけ思いを寄せるが、彼はそれを冷酷に斥ける。エコーはそのために森の中へと隠れ、悲しみの余り肉体を失い声だけを残される。ナルキッソスはその後も自分に言い寄るニンフや乙女たちを同じようにあしらったので、一人の乙女の願いを受けた復讐の女神により、その愛を決してかなえられないように仕向けられることになる。

すなわち以上から判明になることは、エコーこそがナルキッソスのあの悲劇をもたらすことになった第一原因者であったということである。エコーとのいきさつがなければ、ナルキッソス

にこのような結末が訪れることはなかった。つまりエコーはナルキッソスに必然的に先立する者である。換言すれば、エコーによってしつらえられた舞台上で、ナルキッソスのドラマは進行するということでもある。

ところで「エコー」すなわち「こだま」とは何か。言うまでもなく「反響」である。さて私たちが「こだま」を最もよく体験するのは、深い谷間を挟んで、山と山とが向い合わせに屹立する場所であろう。これはまさに、「鏡」や「反省」の構造そのものを暗示してはいはしないだろうか。

ここから「エコー」は、ナルキッソスの心底深くに秘められた「人間」としての根本構造にほかならないことが推測される。「エコー」の物語がどうしてナルキッソスのそれに先行しなければならなかったかの理由も、まさにそこにあるに違いない。そしてナルキッソスの悲劇の場面で「エコー」が終始そこに居合わせながらも、目立つ位置を決して与えられていなかったのも同じ理由による。

エコーとナルキッソスとは別のものではなく、エコーによって設定された舞台の上でナルキッソスが破滅を迎えることは、一種の復讐物語のように見えてもっと深い意味をもち、「人間」特有の構造こそが悲劇の原因であったことを示すものであろう。⁽⁷⁾そしてこのことについては、すでに1に述べた通りである。

すなわち「反省」において開示された両項のうち、私たちが「こちら側」に依存し、「あちら側」は断絶を挟んで「不明」の中に置かれることが、しかも他方これら両項の対向したかたちはいかんともなしがたく私たちにかけていることが、人間特有の危機的状況を生み、またありとあらゆる人間的問題を私たちのもとにもたらしたのであった。

しかしここで「エコー」は一方、私たちの構造の中に隠され私たちの気づかなかった重要な一点をも指し示してくれているのではあるまいか。「こだま」はさきにも触れたように、何より「反響」である。深い谷を挟んで屹立し向い

合った二つの山は「呼応」し合う。これは1に見た「人間」の在り方とはずい分異なっているようにも見える。そこでは「向う側」は「不明」であり「沈黙」していた。だがここでは応答する。そして谷が深ければ深いほど、その反響は鮮明となる。

ここには一つの大きな転換がある。固い沈黙を守っていると思われた「向う側」が「声」を発する。それはたしかに、「こちら側」の「言葉」をもっているわけではあるまい。しかし最早それは断絶の彼方であって無気味に立ちほだかる「異者」ではなく、ともかくこちらへと語り掛けてくるものなのである。しかも両者を隔てる断崖が切り立ち越えがたいほど、その声はよく響く。ここではかつてネガティブと思われていたものが、かえってポジティブなものへと転化する。

ではなぜこのような転換は生じたのであろうか。「反響」という事態においては、何よりも対向したものがきちんと向き合うことこそが大切であった。ここにきて私たちは、さきの場合、自らの中の「向う側のもの」に決して明確に向き合おうとしなかったことに気づく。「こちら」への執着がそうさせたのか、「あちら」への怖れがそうさせたかは不明であるにしても。しかしこれらは多分別のことではなく、同根のものであるに違いない。

要するに向き合うも向き合わないも私たち自身に任されているところに、この二極に分断された構造自体のもつ特殊性はあると言えよう。このつぐないがたい深い「亀裂」の中にこそ、「人間」に特有の「自由」や「責任」などは生うでもあろうが、いずれにせよ私たちがきちんと向き合う「姿勢」を取らない限り、「向う側」の「沈黙」は破れない。向き合うことによって「向う側」ははじめてその真の姿を現わす。そしてそこに開示されたかたちこそ、まぎれもなく本来のものであると言うことができよう。ここで二つの側は対等に真直ぐに向い合う。「こだま」の成立する場がそうであったように。

ではそこに生ずる「反響」ないし「呼応」と

は何か、それは一たいどんな意味をもつのか。この点についての考察がつぎにはかられなければなるまい。そしてそのことは同時に、「向う側」へのポジティブな接近を何らかの意味で要求するはずである。

3

ここでまた別の古い物語の中の一節を提示することからこの考察をはじめることにはしたい。

白雪姫の継母である王妃は、「鏡」に向ってたずねる。「鏡よ、鏡、国じゅうで誰が一ばんきれい？」と。鏡は答える。「お后さま、あなたが一ばんきれい」と。しかし白雪姫の成長ののち、王妃の同じ問いに鏡は答える。「白雪姫が一ばんきれい」と。

これは何を意味するのか。すなわち「鏡」は決して偽らないということであろう。「鏡」は受け取ったものをそのまま投げ返す。「こだま」についても同じことが言える。投げ掛けた声はそのまま送り返される。したがってそれは、「反省」の場合にも適合されるに違いない。なぜなら「鏡」や「こだま」は、ここではその外的モードとして設定されているにすぎないのであるから。

さてこちらから投げ掛けたものがそのまま投げ返されてくるということは、無論上に述べたところから予想されるように、「向う側」が決して偽らないということと深く関係している。それはいわば「無私無心」の反射面であって、そこに映じたものを何の粉飾もなしに「こちら側」へと突き返す。しかしその時はじめて、「こちら側」の「私」が際立てられることになる。自らが「私」であることを如実に知るの、「無私なもの」に出会ったことであろう。それは「私」にとっては、決定的な見知らぬ「他者」の開示という衝撃的な出会いであるに違いない。ここまできて私たちは、あの青年初期の「鏡」との出会いの真の意味を知ることになる。そこに映し出された「異者」は、こちらの「エゴ」を容赦なく照らし出す。そしてその時、私たち「人間」の代表者たる青年は、そして同じ状況に置

かれたデカルトもまた、一そう執拗にこちらの岸辺へと寄り纏ったのであった。

ところで「向う側」が「無私」であり偽らないということは、そこに「真実」が、さらには「真理」の座があることが察知される。したがってこちらから投げ掛けたものがそのまま返されてくるといっても、投げ掛けたものが向うから帰ってきたものと完全に同一ではありえない。それはあくまでも「真実」の壁にはね返って帰ってくるのであり、このものははじめにはなかった「真実」を伴って帰ってくる。このことは重要である。

すなわち私たちが一方の側に無理に固執せず、自らが本来所有する在り方に従って「向う側」ときちんと向き合うならば、そこにはどこまでも投げては返す往還関係が成立するのであって、これこそが「反響」や「呼応」と呼ばれたものの本質であろう。「こだま」が恰好の条件の中で幾重にも重なった響きをつくり出すように、度重なる往還は「自己」の「真実」が次第にあらわとなる過程を意味している。それは「エゴ」への固執からは決して見えてこなかった真の「自己」との出会いの行程であり、青年が「鏡」に向って問うた「自分とは何か、人間とは何か」という問いに対する真の解答が用意されようとする瞬間である。これを私たちは「自覚」と呼び、言葉の真の意味で「反省」と呼ぶのではないだろうか。私たちはたしかに「反省」の構造をもってはいる。しかしそれが正しく機能しない限り、それは何ほどのものでもあるまい。だがすでに見たように、私たちは他方そうしたくない執拗な傾向をもつ。それは多分、「反省」の両項が絶対の「深淵」によって切り分けられていることと無関係ではあるまい。この「隔絶」がおのずから「こちら側」への執着を促す誘因となるに相違ない。そしてそこにはさきに触れた人間の「自由」の問題が深く隠されてもいる。しかしながら他項もまた自身の構造の中に厳然と存在する以上、これを切り離し切り捨てようとするれば、人は当然のことに「迷妄」に陥るよりほかはない。そしてありとあらゆる「幻覚」

の中で、「真実」からいよいよ遠く引き離されてゆく。

だが逆に本来の対峙のかたちが正しく保たれるならば、両項を隔てる絶対の断絶こそが、「真実」の声を一そう深く響かせる。ただここで銘記されなければならないのは、「呼応」が成立し、往還がいくたび繰り返されようとも、「向う側」への到達は私たちには予め阻まれているということである。「鏡」の裏に廻ることが不可能なように、そこには絶対の隔絶が置かれている。したがって私たちが「真理」そのものを入手することはありえない。そこへの漸近が可能なだけである。

ここからして「人」の「間」と表示される「人間」という言葉自体、実によく私たちの在り方を示しているように見える。「人間とは？」と問うのが「人間」であるが、その答えはすなわち「真実」は、決して私たちに与えられはしない。問い続けることの中から「接近」の喜びが与えられるのみである。その意味で人は決して人になりおおせることなく、つねに途次に在る者ということができるであろう。また「人間」のこうした在り方がはじめて明確に開示される青年前期、そこで往時「成年」の式はもたれたが、それ以後は「成人」の名が用いられることもこの本質と深くかかわってのことに違いない。人は生ある限り「人に成り続ける」のであって、「人」という終着点を用意されていないのである。このような存在者が他にあるだろうか。だからこそ人は、「人間とは何か」と問わざるをえないのかもしれない。

しかしながらこのことは裏を返せば、私たちが「向う側」に「真理」のありかに到ることができれば、「反省」における対向した二項間のダイナミズムないし相互作用は終息することを意味するであろう。そのことはここにいわゆる「真理」が、とりも直さず対立した二項の一致を指向することを暗示する。そこでは、「自」と「他」、「主」と「客」の区別は止揚される。そこから逆に「反省」という行為そのものが、そもそもそのための過程にほかならなかつたこ

とが写し出される。すなわちそこでは、己れを知ることが即他者を知ることにつながるようになる。しかもその対峙したかたちからくるダイナミズムは、自己のすべてをにかけて他を問う他はそのすべてを以てこちらに答えるということであるから、ここにいわゆる「真理」はこちら側から言えば、「人間」の全存在の意味の開示に相当し、「反省」とはとりも直さずそこへの接近にほかならないということになるであろう。ここでの「真理」はしたがって、決してその切片ではなく、人間まるごとを照らし出すそれであり、換言すれば「実存」のすべてをにかけてあがなわれなければならないそれでもあるとすることができる。しかしそれこそが真に「真理」の名に値するのではあるまいか。ここに私たちは「反省」という行為の実に厳しい姿を突きつけられることになろう。それは「深淵」を隔てて切り結ぶ真剣勝負にも似て、一歩誤れば私たちの全存在を危機にさらさず結果を招く。無底の水に呑み込まれたかのナルキッソスのように。

さて以上と関連していま一つ重要な点が指摘されねばならない。それはすなわち「反省」の構造における「向う側」は、鏡像に典型的に見られたように、その無私無心をもってこちらの私心や虚偽を見抜こうとでもするかのように凝視していたということである。それはちょうど前に立ちはだかり、こちらを咎め見張っているようにも見えることであろう。その時私たちの感じるたじろぎややましさはまさにこのものに対してであり、そのためいくたびその行為を取りやめまた修正しようとしたことであろう。この時私たちは、その「向う側のもの」に対して別の呼び名を与えようとする。すなわち「良心」という名前を。「鏡のごとき良心」という言葉はその意味で、以上のような事態を適確に表現したものと言える。

したがってここにおいて、さきに「真理」と呼ばれたものは「良心」と重なり、また同様に前述の「反省」のダイナミズムは「道徳」と密接にかかわり合うことになろう。さて「道徳」は「義務」と無関係ではありえない。ここから

判明になることは、「反省」の行為が私たちにとって決して任意なものではなく、必然的なものであるということである。私たちが「反省」を通じて「自分とは？ 人間とは？」と問い続けることは、私たちの責務であって勝手に中止し放棄することが許されないものである。なぜならそこにこそ「人間」の基本的一点はまぎれもなく存立するのであるから。その真摯な努力を怠れば、人はたちまち人でないものへと転落してゆくことになる。ここにきて私たちは「反省」の行為の厳しさの、換言すれば人が人として生きることの厳しさの真の原因へと行き当らざるをえない。

なお1に見たように、「反省」の「向う側」はまた「生・死の根源」にかかわるものとして予想されたのでもあった。ここには「向う側のもの」を真の「他者」へと、そして「超越者」へとつなぐ道筋が予測される。「道徳」や「義務」の問題も多分このものと究極において無関係ではないに違いない。しかしながらそれについて論ずるのが当面の目的ではない。ただここで一つ言えることは、断絶を挟んで対向した「向う側」の奥がどれほど深くどこまで広がっているかこちらからは見通せない。しかし「反省」の行為の進展と深化は、結局自らを超えた「このもの」の前に私たちを立たせることになるであろうことは予測できる。なぜなら、対向したこのかたちは究極的な「対向」のもとに、「断絶」によって切り分けられた「対向」そのもののもとへと私たちを導くであろうからである。

ところでこの「反省」の構造が「人間」にとって最も本質的なものである限り、それは当然外的な世界にも適応されざるをえないであろう。他の人々との間に、「もの」との間に、その他一切との間に。相手が何であれ、私たちとそれらの間に完全な対向関係が成立すれば、両者の間にお互いの全存在をかけた「呼応」が成立する。そしてこの場合それを支えるものは、何よりも互いの間に置かれた越えがたい空間的「断絶」である。その時私たちに聞えてくるのは相手の肉声ではなく、存在そのものの声であろう。

それは相手にとっても同様である。その意味では「石」も声を発し、「草」もまた語る。私たちはここでまるごとの「自己」を知り、まるごとの「他者」を知る。これこそが真の「交流」であり真の「理解」にほかならないであろう。無論絶対の「断絶」は両者の完全な一致を許さない。そこには無限の接近があるだけである。だからこの「交流」には終りが無い。だが終りのないことこそが喜びでもある。双方が汲めども尽きぬ宝庫となり、つぎの「呼応」へと誘なわれてゆくのであるから。両者の関係はあくまで対等であり、そこには何らの優劣もない。そして「交流」を重ねるごとに、私たちは自身の深化をそして成長を知ることになるであろう。それはかけがえのない「真理」へと至る一過程にすぎない。

「相手の胸をかりて成長する」という言葉はまさにこのような「人間」の在り方を指して言われるのであって、真の「対話」(dialogue)の原型もここにあると行うことができよう。ここでは「言葉」はむしろ本質的なことではない。向い合わなくとも言葉は聞えてくるかもしれない。もっともそれは単なる音声に近いと言わなければならない。「対話」では「対すること」こそが本質的であり、そこから聞えてくる存在そのものの声が最も重要である。それはたまたま「言葉」であるにしても、言葉であって言葉を超越する。むしろ「言葉」は逆に向い合うことの中からこそ、おのずと導き出されると言う方が適切であるかもしれない。

その意味で古来より思索が「対話」というかたちで行われ、またそのダイナミズムが後に「弁証法」(dialectique)として定着されたのも、深く「人間」の本質構造に根ざしてのことであるに違いない。

どうして私たちには、このような「亀裂」を挟んで対向するかたちがかげられたのであろうか。その「亀裂」はつぐなわれなければならない。その時人ははじめて「人」たりうる。しかしこの行為の完全な達成は予め阻まれている。だから

といって私たちはそれをやめることはできない。それは私たちにすでに委ねられてしまったこの構造自体の要請なのであるから。

その姿はあたかも無底の亀裂の上に張り渡された一本の細い綱の上を渡ってゆく、綱渡りの芸人のそれにもなぞらえられるであろう。一瞬の油断は転落へ、そして破滅へと導くに違いない。少しずつ少しずつ前進してゆかねばならぬ。何よりも「姿勢」が重要である。しかしそれを学ぶことは容易ではない。試行錯誤を繰り返し、厳しい練習を積み重ねてゆくよりほかはない。いやもっと言えば、人生そのものがその練習であると言って差し支えないのではあるまいか。

〔註〕

- (1) いずれもラテン語に由来する同一の言葉で示される。例えば、reflection (英)、réflexion (仏)、reflexion (独) など。
 - (2) 森 浩一編「日本古代文化の研究 鏡」参照
 - (3) ブルフィンチ「ギリシア・ローマ神話」参照
 - (4) 「昨日の省察によって私は懐疑のうちに投げ込まれた。それは最早私の忘れえないほど大きなものであり、しかも私はそれがい
- かなる仕方で解決すべきものであるかを知らないのである。かえって恰も渦巻く深淵の中に不意に落ち込んだように、私は狼狽して、足を底に着けることもできなければ、泳いで水面に脱出することもできないというありさまであった」(傍点筆者)
- Med. II, A. T. VII, p. p. 16.
- (5) この点に関連して、「精神分裂病」が「人間」の基底にかかわる病いであることを改めて知らされる。その治癒の困難性も多分このことと無関係でないであろうし、青年期に発病する場合が多いことも極めて暗示的である。
 - (6) Med. II, A. T. VII, p. 17.
 - (7) 「薔薇物語」などにもその典型が見られるが、中世まで人間の内面的特性がそれぞれ独立した人物などのかたちを取って外化されることがしばしばあった。ナルキッソスとエコーの物語もそれと同系のものと見ることが可能であろう。
 - (8) グリム童話「白雪姫」参照
 - (9) 例えばプラトン「対話篇」など
 - (10) 例えばヘーゲル哲学など